



二足歩行ロボットのプラットフォームを作りたい

有限会社 ピルクス・ロボティクス

Jin Sato さん インタビュー

LEGO MINDSTORMSのあの人がロボットビジネスを始めた！ 本誌連載でもおなじみのJin Satoさんが一大決心、それまでのキャリアを捨ててロボットベンチャーを立ち上げた。ROBO-ONEでも有名なJin Satoさんとはどんな人なのか、この際じっくりと話を聞こうということで、設立したばかりの事務所へ向かった。

自分で設計した飛行機を飛ばしていました

もともとロボットについて勉強していたんですか？

Jin Satoさん（以下Jin）：いえ、航空力学です。Uコン^{*1}をやっていたんですよ。中学生のときに独学で航空力学を勉強して、自分で設計をして飛ばしていました。地元の模型屋に集まる仲間クラブを作ったりしてましたね。飛行機が好きで整備士になりたかったんです。

自作で飛行機を作っていた？

Jin：ええ。市販キットもあったんですけど、やっぱり自分で作りたくて。当時勉強した本^{*2}はまだ持ってますよ。一生懸命読んでましたね。

でもこの本、大学生向けですよ。

Jin：微積分とかも出てきますからね。わ



中学のときに読み潰した航空力学の教科書とプログラミングに夢中な時期に読んだ人工知能本。

からないところは数学の先生に聞きにいました。実はこれ2冊目で、1冊目はボロボロになって買い足したんです。僕はさそり座なので「スコーピオンシリーズ」って名付けて（笑）。11号まで作ったかな。ワイヤーを1本追加して、エンジンコントロールもできるようにしてました。

そのUコンがどこへつながるんですか？

Jin：パソコンです。当然ですけど、飛行機って落ちるんですよ、操縦ミスとかで（笑）。あと、設計が難しいんですね。主翼と尾翼の面積の比率とか。それをパソコンでやってみたら簡単にできて、使い始めたんです。当時勤めていた自動車メーカーの寮で隣の部屋だったヤツがシャープのMZ^{*3}を持っていて、今でいうCADソフトを作ろうと。

言語はBASICですよ？

Jin：そう、BASICです。翼の面積を入れると全部計算してくれるプログラムを書きました。だんだんプログラミングが楽しくなってきた、ハマりましたね。落ちて壊れることもありませんから（笑）。アセンブラやCP/Mなんかも触りました。オートバイのゲームを書いたら、それが



I/Oのプログラミングコンテストで審査員奨励賞を受賞したときのプレート。カナダへ持って行き、一緒に帰国した。

「I/O」^{*4}という雑誌のプログラミングコンテストで入賞したこともあります。

プログラミング青年、寿司職人になる

その後カナダへ渡るわけですが、なぜカナダへ？

Jin：当時、日本という国が嫌いになってたんです。いろいろあって日本のダークサイドが見えた時期で、日本ってヤバいなって思って。外国から日本を見てみたいいな、ってね。で、いろいろ調べたら海外から正式に申請できるのは、カナダとオーストラリアとニュージーランドだけだったんです。ニュージーランドは田舎ですし、オーストラリアは当時白人主義が強かったり。カナダが一番差別がない国に見えたんですね。

*1 2本のワイヤーで飛ばすエンジン付き飛行機。操縦者がU字型のハンドルを持って立ち、飛行機はワイヤーの半径約15m程度を飛ぶ。当然、操縦者もクルクル回ることになる。昭和30年代に米国から入ってきたが、その後ラジコンに飛行ホビーの座を奪われ下火になった。しかし、根強いファンも多く、現在でも世界大会が開かれている。

*2 電波実験社の「模型飛行機（理論と実際）」は、YS-11などにも関わった日本航空界の権威・木村秀政博士が監修した教科書。とてもじゃないが、中学生が読むレベルではない。昭和45年初版。

*3 当時はパソコンではなく、「マイコン」と呼ばれていた。シャープのMZシリーズは、NECらと並ぶ日本のマイコン黎明期のベストセラー。本体、キーボード、モ